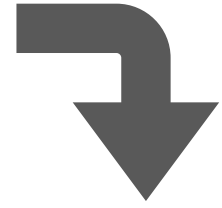


「対人援助実践をリポートするこの一冊」



第3回：第1章-その3-

対人援助職者としての「幹」への気づき



著：小幡知史
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

はじめに

対人援助学会 2020 年次大会において、渡辺修宏先生、二階堂哲先生、そして私、小幡知史の3名で、企画ワークショップを開催しました。そのワークショップのタイトルは、「対人援助実践をリポートするこの1冊」でした。

対人援助臨床で行き詰ったらリポートを試みる。そんなリポートのスイッチは、もしかしたら良書なのかもしれない。そんな思いを伝えたくて、思い切って手を上げた企画でした。

はじめまして。私は小幡と申します。

まだまだ勉強中の未熟者ですが、現在私は、茨城県にある障害児通所支援事業所で中間管理職のような立場で子どもを対象に対人援助の実践を行なっています。

前回（第1回および第2回）までの“語り”は、私の共同企画者である渡辺先生によって綴られましたが、今回は私、小幡がそのバトンを引き継ぎ、対人援助のリポートについて少し、そして新たなストーリーをご紹介したいと思います。すなわち、2020年度の対人援助学会の企画ワークショップで私が紹介させていただいた、私にとって「対人援助をリポートしてくれた良書」について語りしたいと思います。

大学院卒業を機に

2010年、私は心理系大学院の修士課程を卒業しました。当時の私は、動物実験をメインとした実験的行動分析学に基づく研究をしていました。卒業を目前に控え、進学して研究

者を目指すという道も考えましたが、学部生時代から科学者-実践者モデルへの憧れがあったこともあり、実践の現場に入ることに決めました。

先輩のツテで入職した現場は、いわゆる多機能型事業所でした。生活介護や就労移行、児童デイサービス（現在でいう放課後等デイサービス）が一体となっており、利用者様も子どもから大人まで多様でした。1年目ということもあり、午前中は知的・身体・精神の障害を有する成人利用者様を支援し、午後は障害のある子どもたちを支援し、施設内をあちこち行ったり来たりしながら支援に従事していました。私にとっては初めての社会人経験、初めての福祉現場という意味で、大切な思い出も多くある一方、悪い意味での洗礼を受けた場所でもありました。先輩支援者が利用者様をからかったり手を出したり、利用児の些細な行動にガチギレして怒号を撒き散らしたり…。他にも紙面では書けないようなグレーな出来事、時には真っ黒な事例も、かなり経験させてもらいました。

そういった雰囲気嫌気が差してきた頃、当時の施設長から、新しい法人の立ち上げメンバーに誘われました。のべもなく賛同し、退職して新法人へうつることにしました。

新法人は生活介護だけだったので、主に知的の成人の方と一緒に農作業などをしてのんびり支援させていただいていました。さらに数年後には児童を対象とした事業も立ち上げることに…。そんなこんなで、今の事業所に所属させていただいております。

実践のジレンマ

当時は、立ち上がったばかりの事業所ということもあり、自分の裁量でできる範囲が以前の職場よりも格段に増えていました。思いついたことをどんどん実行することができ、伸び伸びと支援ができていました。しっかりと支援計画を立案し、それに基づき支援内容を考え、さらにデータもしっかりとって支援の質を担保できるように…。この時は、毎日が新しい挑戦と発見で満ち溢れていたように記憶しています。

しかし、一介の支援員から中間管理職へと職位があがるにつれ、状況は変わっていききました。直接支援だけでなく、人員配置の問題、事業所の運営の問題、さらには経営の問題などなど、考えるべきことは山積みとなっていききました。質の高い支援を突き詰めるということは対人援助のほんの一側面でしかなく、それを継続して成り立たせるためには、数多くの問題に対しても並行して取り組まなければいけないことを思い知らされました。

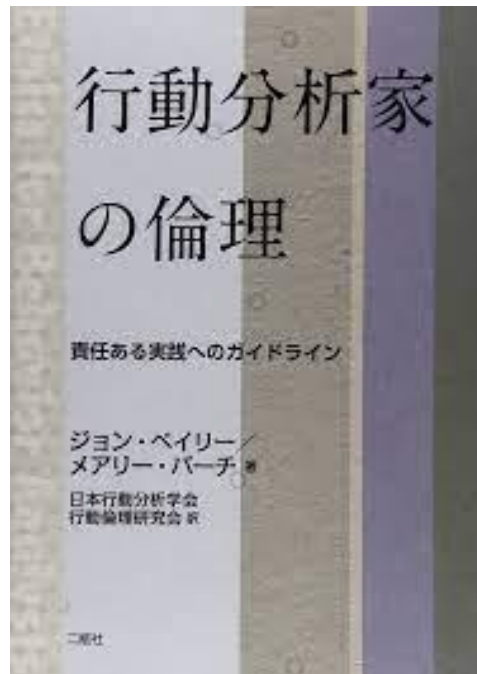
そのような事柄に忙殺されていると、本末転倒というべきか、だんだんと直接支援に向き合う機会が少なくなり、さらには自身の中でのそれへの優先度も下がりつつあることを感じていきました。そんな状態になってからふと、自分は支援者として、専門家として、これでいいのか？という疑問・ジレンマが常に心の中に渦巻いていくようになってしまったのです。

対人援助をリポートする1冊との出会い

上述のようなジレンマを抱えている状態に陥り、毎日がどこか虚しくなっていました。現実に直面する中で、支援者としての視座を重視すべきか、管理者としての視座を重視すべきか、はたまた経営者としての視座を重視すべきか…。毎日、ブレにブレていったのです。

そんな時に出会ったのが、2015年に発刊された「行動分析家の倫理～責任ある実践へのガイドライン～」でした。自分が大学院時代に行動分析学を学んでいたこともあり、それまで自身の専門職としての立場は行動分析学に依っていました。しかし、実践の場に身を置いた時、自分がなにを指針として、実践でどのように振る舞えば良いのかを教えてくれる人も、本も、少なくとも私が見聞きした中ではあまりありませんでした。

本書はタイトルにもあるような行動分析学における倫理、さらに行動分析の専門家(BCBA)として守るべきガイドラインの紹介、行動分析の専門家として備えておくべき倫理的なスキル、専門家になろうとする人への助言など、行動分析を学んだ者ならば誰しもが知るべき有益な情報に満ち溢れています。また、本書の一部は私の恩師である森山哲美先生が訳されており、それもまた本書が私にとって特別な一冊となっている理由でもあります。



ジョン・ベイリー(著), メアリー・バーチ(著), 日本行動分析学会行動倫理研究会(翻訳)
(2015) 行動分析家の倫理—責任ある実践へのガイドライン

上述の本は、行動分析学を学んだ者が実践に取り組む際に、具体的にどのような点に配慮すべきか、その倫理的な事柄がかなり細かく述べられています。さらに現場で直面する現実問題において、専門家がどのように振る舞うべきかについても、具体的に取り扱いがあります。その内容はまさに、私が悩み、葛藤しながらも、求めている事柄でした。また本書を読んで、自分が直面している事態や問題は決して珍しいことではなく、むしろ行動分析学を学んだ実践者だれしものが直面する「あるある」であるということも知ることができました。

本書に出会ったことで、支援者として、管理者として、経営者として、様々な立場にある自身が、今後どのように支援をしていけばいいのか、ヒントを得ることができました。この発見は対人援助職者としての私にとって、大きな「幹」となっています。

そして現在

その後、研究に対して真摯に向き合う必要性を感じ、仕事を続けつつも2016年に博士課程に入学し、現在に至っております。

実際のところ、今も数多くのジレンマに直面して、日々悩んでいる毎日です。しかし、渡辺先生と二階堂先生と一緒に対人援助学会で企画させていただいた「対人援助をレポートするこの一冊」を通して、また、更なる新たな本との出会いがありました。本企画を通じて、皆さまと一緒に今後も、対人援助をレポートする一冊を模索していけたらと思います。

つづく